

トゥーソン調査記

2010年4月7日から14日まで、アリゾナ州南部のトゥーソン市に位置するパスクア・ヤキ (Pascua Yaqui) 居留区にて、北海道大学グローバル COE「境界研究の拠点形成」及びスラブ研究センターの支援を受け、資料収集を行った。本調査の目的は、本年秋より開始される境界研究に関する北大総合博物館グローバル COE 第4期展示「先住民と境界 (仮題)」で使用する展示資料の収集であった。

筆者が2003年より研究対象とする先住民ヤキは米国・メキシコ国境の両側に居住する人々である。第4期では、国境と先住民の関わりについて事例を基に示すべく、ヤキの人々およびアイヌの人々に関する展示を企画している。ヤキについては国立民族学博物館にいくつか所蔵品があるものの、民族全体の文化を1つの企画展として紹介した例は、少なくとも著者の知るところでは日本国内ではこれまで行われたことがない。

展示の目玉となるのは、ヤキの伝統工芸家であるルイス・デビッド・バレンズエラ (Louis David Valenzuela) 氏の作品である。バレンズエラ氏はヤキの集落において伝統文化に触れて育った後、シカゴの美術大学で現代美術の技法を学び、これまで米国各地で展覧会を開催してきた。同氏の作品は、ヤキの伝統芸能である仮面の踊りに使用される仮面に、現代美術的な要素を取り入れて制作される。本展示には、バレンズエラ氏の作品 (仮面2点、彫刻1点を予定) に加え、彫刻の原材料となる木材の展示や、同氏の作品制作の様相を収めたビデオの上映も行われる。



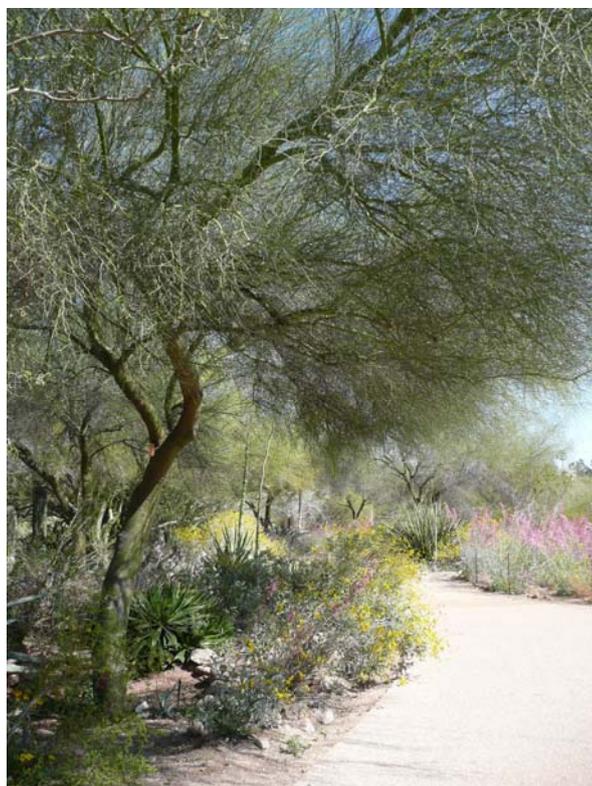
仮面を彫るバレンズエラ氏

ヤキは民族として様々な企業や娯楽施設を所有しており、その収益を民族政府のみならず、民族立の高校や図書館、病院などの運営に充てている。さらに、民族の伝統文化を守る非営利組織としてヨエメン・テキア財団（Yoemen Tekia Foundation）を有し、民族の歴史にとって重要な資料の保管に当たっている。同財団を通じ、女性用の伝統装束と、儀礼の音楽に使用される太鼓が収集された。また、ヤキ文化で重要な役割を果たす紙製の花についても、5月に収集され、秋からの展示で公開される予定である。さらに、土曜セミナーでは、ヤキの人々を招き、現在の暮らしや国境を越えた民族のつながりについてお話を伺うことを企画している。

スペイン人が現在のメキシコ北西部から米国南西部に到来した16世紀から、スペイン、メキシコ、米国の主流社会の人々から抑圧されてきた。現在のヤキの人々の間にも無力感や絶望感が色濃く漂い、薬物汚染や自殺といった問題も深刻である。そのような状況の中で、日本の博物館における民族に関する展示の知らせは、大変明るく喜ばしいニュースとして広まっている。筆者は滞在中に民族立ラジオ局の番組に出演し、インタビューを受けた。その後、民族長からヤキ民族の国旗を寄贈され、激励を受けて帰国した。

展示の開始までに、5月と9月のあと2回に渡って資料収集が行われる予定である。何よりヤキの人々の期待を裏切らぬよう、よりよい展示を目指して準備を進めていきたい。

（水谷裕佳：アイヌ・先住民研究センター）



砂漠の街トウソンの春